オリンピックはできるかな？

人権問題をめぐる国際世論

死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会（そばの会）

　ヨーロッパ諸国のように「先進国」と呼ばれる国々では、死刑廃止が当たり前になっています……といった話をすると、必ず「世界は世界、日本は日本、外圧反対！」という反応が返ってきます。過去の法務大臣の中にも「切腹」〔ハラキリ〕を賛美するかのように日本文化の特殊性を語る人がいました。

★☆★

　では、人種・民族の差別について、そんないいわけが通用するでしょうか。

　昨年のリオデジャネイロ五輪では、男子マラソンで銀メダリストの選手が、エチオピア政府による出身民族への弾圧に抗議するパフォーマンスを行いました。

　１９６８年のメキシコ・オリンピックでは、陸上競技で金・銅のメダルを得た黒人選手が表彰式で拳を上げ、アメリカの人種差別に抗議を示したこともありました。

　国内では少数者のこととして無視されてしまう人権問題が、当事者によって、オリンピックという注目を集めるイベントでアピールされたのです。選手生命をも賭けたそうした行動〔アクション〕は、世界中にメダル以上の感動をよびさましました。

　差別を自国の文化だと開き直ることは許されません。人権の根幹である生命を奪う死刑制度はどうでしょうか。

★☆★

　ファイザー製薬は、人命のために開発された薬品が死刑の執行に使われるのは耐えられないと、死刑のために使用される製品の出荷を控えました。死刑を廃止しているＥＵ諸国の製薬会社も同様の措置を取っているために、アメリカでは薬物による死刑執行が困難になっています。絞首刑（日本では今も使われていますが）や電気椅子による処刑も、今では残酷な方法だとして、復活することは躊躇されています。

　「外圧」はそんなふうに働いています。

★☆★

　今、安倍首相は、共謀罪＝反テロ対策法を成立させないと、東京オリンピックが開けないかもしれない、と主張しているそうです。

　それよりも、「共謀罪や死刑がある日本のような国でのオリンピックには参加したくない」という世界のアスリートたちのボイコットのほうが現実的かもしれません。

　２０２０年前に日本の死刑廃止が実現できれば、祝福し、安心して参加してくれる人たちが増えるかもしれません。そして改めて、国威発揚のためではない、個人（や団体）の活躍が競われる集いとして、世界平和の象徴として五輪が復活する契機になれば、と願います。